

ワルウイテくるみ PLUS

神楽陽子

表紙イラスト：ながのろ



試し読み版

二次元ぷち文庫

**当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『リトルウィッチくるみPLUS』
に基づいて作成しております。**

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



ワルウイテくるみ PLUS

神楽陽子
表紙／ながのろ

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

せのうくるみ

瀬納胡桃

魔法少女ダイヤキュートに変身し、魔女マーヴェルからエレメントオーブを取り戻すため闘う少女。

チェルシー

月の世界ムーンヒロウからやってきた妖精。胡桃の魔法少女の仕事を持ちかける。

マーヴェル

ムーンヒロウからエレメントオーブを盗み、地球に降りてきた悪名高い魔女。

突然の渋滞と、車道を逆走する人々。何事かと振り向いた女性も、天の太陽さえ遮る巨軀きよくを見上げて金切り声を上げる。

「きゃあああ！」

向かいあうビルの間を狭し狭しと這ってくるそれは、形こそ蛇だが——化物だ。十メートル近い巨体で歩道橋を押し倒す。

ガッシャーン！

逃げ遅れ、恐怖に四肢を縛られた子供がいた。

「ママ、怖いよお！」

「いやああ、誰かあの子を助けて！」

蛇の眼が怯える少年を捉える。もうだめだ、と誰もが肩を落とした。

『グアアアア!!』

ところが格好の獲物を貪り食らおうとした瞬間、魔物が顎あごを打たれたように頭を跳ね上げた。朱色の衣が疾風ともいえる速度で少年を包み、母親のもとまで送り届ける。

「もう大丈夫よ、あとはあたしに任せて！」

ワッと大きな歓声が起こった。

「ダイアキュートだ、来てくれたんだ！」

魔法少女は得意げにVサインを返すと、背丈以上もあるロッドを水平に構えて怪物と相

対した。眩いプラチナゴールドの髪が魔物の咆哮ほうこうを受けて舞う。

『グルル……グオオオオ！』

「さっさとかかかってきてよね、こっちは授業中なんだから」

たおやかな細身が纏まとうは、ヴァーミリオンの鮮やかなドレスだ。ファッションコレットで絞り込み、柳腰を強調するとともにスカート皺を綺麗に揃える。

スカートもパニエ（アンダースカート）も、縁という縁にあしらわれたのは愛らしいフリル。パフスリーブの口は勿論もちろん、極めつけは胸元のドレープ（フリルを束ねたもの）というお洒落振りである。

『グウオオ！』

「当たらないよーだ！」

大蛇が尻尾を振り下ろすと同時にダイアキュートは跳躍した。スカートが空気を含んで膨らみ、あられもない太腿がチラリと衆人の視線を誘う。

純白の薄タイトを膝上まで伸ばす、ムッチリとして、それでいてしなやかな脚線。比率を見て腰は高く脚は長く、ドレスの中に理想的な女体曲線が覗えた。

「ええいっ！」

ビルの壁を蹴ってさらに飛翔すると、反動で生地を押し上げる美乳も跳ねる。魔法少女は流動するそれを二の腕で中央に寄せ、グローブに皺よが縞よるまで力んでロッドを前方に押

し出した。ハート型のリングに囲われた先端の宝玉がエメラルド色の光を収束させる。

二重瞼の下で、つぶらな瞳が蒼く光った。

「いっくよお……」

瑞々しい唇の端を吊り上げ、あどけなくも凜々しくはにかむ。怪物が鋭い牙を並べた大口を開くや、そこにダイアキュート渾身の一撃が決まった。

「必殺、エーテルブラストおおお！」

バキイイ！

ロッドで力任せに左頬を殴り、後転して距離を取る。魔法少女が三回転して着地すると同時に爆音が地を揺るがした。

ドッゴーン！

大蛇が苦悶の唸りを上げ、やがてズシンと倒れ伏す。

勝利に街は俄かに騒ぎ立ったが。

「ありがとう、ダイアキュート！」

ロッドを肩に担いだ少女は慌てて。

「ご、ごめんなさい！ あたし、急ぎますから！」

来たときと同じく、早々に空の彼方へ消えていった。

☆

名門私立とは名ばかりの、とある学園。授業の最中だけあって静かに見えて、生徒たちは居眠りしたり雑誌を読んだり、お喋りしたりと、ごくごく普通の教室風景である。

「ねえねえ、知ってる？ 先週もこの辺りに現れたらしいよ」

「ダイアキュートでしょ！ でも怪物とか、ホントの話なの？」

そこへ、けたたましくドアを開いて躍り込む女生徒がいた。

「はあ、はあ……先生、ごめんなさい」

翠と白のツートンカラーで構成された夏物セーラーに身を包んだ彼女も、正真正銘この学園の生徒である。

黒板に英字を刻んでいた女教師が溜息で迎えた。

「瀬納^{せのう}さん、貴女しよっちゅう授業を抜けるわよね。本当にトイレ？」

「え、えと……そうですよ」

真つ赤な嘘。瀬納^{くろみ}胡桃はクラスメートの視線をチクチク感じながら、窓際の席にようやと腰を落ち着けた。

男子生徒が、窓の外を見詰めてたそがれる彼女を横目で覗う。

「やっぱり胡桃ちゃん、可愛いよなあ」

「おいおい、本人に聴こえないからって勝手に『ちゃん』付けかよ」

聴こえている。胡桃は赤い顔を窓ガラスに映して締まりない笑みを浮かべた。

(あたしって、イイ線いってるんだ……えへへ)

赤子のようにあどけない童顔はご愛嬌、セーラー服をはち切らんばかりに成熟した肉体を男子生徒が放っておくはずがない。襟元から始まる雄大な曲線は、夏服では包みきれず裾が臍まで届かない。その分プリーツスカートを引っ張り上げれば、今度はムッチリと脂を乗せた太腿が露になってしまう。

しかもこれだけの肉体にサラサラと流れるような髪を併せ持つのだから、女生徒だつて注目する。休み時間は友人に長い髪を梳かれることもしばしば、両端のおさげを紐解けばクセのないストレートが尻まで届くので、ツイントールに限らず様々なヘアスタイルが可能だ。女子が何かと触りたくなる気持ちもわかる。

また朗らかな性格で人当たりがよく、生徒に限らず教師にも受けがいい。これで成績も人並み程度であれば何も言うことはないのだが。

(魔法で試験もどうかできないかなあ)

と心の中で呟きながら肝心の授業も聞かず外を眺めていると、何かが見界に飛び込んできた。身の丈三十センチほどの、羽根を生やした女の子。

「胡桃、お疲れ様」

「なんだ、チェルシーかあ」

胡桃はさして驚かず、窓を少し開く。

「もう。授業中はへんな事件起こさないでって、あのオバサンに言つといてよお」
魔法少女を始めて三ヶ月、瀬納胡桃はこれまでのことを思い出した。

地球の周りを公転する月の軌道に沿って、もうひとつ人の住む世界があつた。その名をムーンハイロウ、初めて聞いたときはサッパリだったが、チエルシーは「土星の輪みたいなモノ」と煎餅をかじりながら語つた。

その世界の住人は、地球をダイアキューブと呼ぶ。土の球体を意味するそうだと。ムーンハイロウは大気が「エーテル」という、魔力の源となる物質に満ちており、鍛錬すれば誰でも魔法を扱うことができるという。

「へー、なんかマンガみたいだね」

「そうそう」

チエルシー自身もそこそこの使い手だったと、彼女は漫画を読みながら語る。

ムーンハイロウはいままでこそ緑溢れる平和な世界だが、かつて「エレメントオーブ」を巡って一度だけ大きな戦乱が起こつた。エーテルを凝縮した物体らしく、それがあれば天変地異さえ思うがままに操ることができるとらしい。しかし混乱の最中に資料のほとんどが失われ、オーブの正体に関しては推測の域を出ないとか。

ムーンハイロウの住人は二度と過ちを繰り返さぬよう、エレメントオーブを封印した。

ところが三ヶ月前、悪名高い魔女・マーヴェルがそれを盗み出したのだ。

「あのときのコト、思い出しただけでもハラワタが煮えくり返るわっ！」

マーヴェルは日食の瞬間だけ開くゲートを通って追っ手を振りきり、ダイアキューブに逃げ込んだ。つまり次の日食まで、ムーンハイロウはマーヴェルをどうにもできないのである。ただ、チェルシーだけは小さな身体を活かして同じゲートに滑り込めた。

しかしムーンハイロウと違って、ダイアキューブの気はエーテルで満たされておらず希薄で、チェルシーは魔法を使うことができない。対するマーヴェルはエレメントオーブから無尽蔵にエーテルを補充することができる。もつとも、魔女本人もオーブのすべてを解明しているわけではないらしく、使用には相応の危険が伴うはずだが。

ムーンハイロウにも帰れず進退窮まったチェルシーは、そこで胡桃にマーヴェル捕縛の依頼を持ちかけた。実はダイアキューブでも、特別な人間であれば魔法を使うことができるのである。

日食の間だけ両世界が繋がるのは先の通り、このとき大量のエーテルがダイアキューブに流れ込む。まさにこの瞬間に生を受けた者は、体内に高濃度のエーテルを宿す。つまり大気中のエーテルが希薄であつても魔法を操れるのだ。

世界各地で見られる奇跡を起こした聖人の逸話などは、おそらくその人物が「月の洗礼」を受けた子だったのだらうと、チェルシーはコーラを飲みながら語る。

胡桃もまた「月の洗礼」のもとに生まれた子である。彼女はダイアキュートとなり、魔法の杖、プラストチャージを武器にマーヴェルを追うことになった。悪い人は放っておけないという正義感が半分、もう半分は——私欲だったりする。

魔法は戦うためだけにあるのではない、この力があれば何だってできる。マーヴェルを捕まえれば、効果抜群の惚れ薬やダイエットキャンディの作り方を教えてくれるという。そしてもうひとつ、胡桃には魔女を追跡する理由があった。以前マーヴェルに変な薬を飲まされ、公衆の面前で放尿させられたのである。

「あのとときのコト、思い出しただけでもハラワタが煮えくり返るっ！」
「ちよつと、それ私の台詞」

マーヴェルは胡桃が体内で生成する高濃度のエーテルを狙ってもいるのだ。多用禁物のエレメントオーブとは別に安定したエーテルを確保するためだろう。

かくして魔法少女と魔女の戦いは、三ヶ月目に突入した。

チエルシーが羽根を伸ばして去ろうとする。

「じゃあ、先に帰ってるわ。ノラクエの続きだったの」

「いいなあ、チエルシーは学校がなくて」

溜息ひとつ、と思いきや。轟音とともに校舎が震えた。生徒たちが慌てふためく。

「うわっ地震か!? ……おい、あれ見ろ！」

男子生徒が指さす窓の向こうを見て、全員が血相を変える。

「きゃあああ! かつ、怪物よお！」

隣のクラスからも悲鳴が聴こえる。校内はパニックと化し、男子も女子もあてもなく駆け出した。その中で舌打ちする少女がひとり。

「あっちゃあ……仕留め損ねてみたい」

授業に戻ることばかり気にして攻撃が浅かったか。さっきの大蛇が牙を光らせ、運動場に尻尾を引き摺り迫ってくる。

「胡桃、変身よ！」

「わかってる! ええと、よし！」

変身するのにパニックはむしろ都合だ、胡桃だけ廊下を逆走して適当な窓を開け、身を投げ出す。

「ダイアキュート・スキル・アープ！」

少女は落下せず、宙でゆつくりと旋回を始めた。虹色に染まったセーラー服がキラキラと光を散らして霧散する。

その粒子が裸体を隠すように渦巻いて、粒から糸、糸から絹地となつてセーラーとは形のままたく異なるワンピースを形成していく。照り返るほど鮮明な朱色、そこにレースで

編まれた襟を重ね、腰をファッションコルセットで絞る。

スリーブが膨らみ、袖口が窄まる。対照的に大きく広がるのは、パニエを下に合わせたミニスカート。ソックスに代わって白タイツが膝まで薄く伸び、爪先をクロスサンダルが可愛く結ぶ。

黒かった髪は根元から毛先まで白金一色に染まり。カチューシャと裾にフリルを贅沢に並べ、胸元をドレープで飾れば変身完了。

双眸そうぼうがサファイアに似た煌きを宿す。

「カモン、ブラストチャージ！」

そう唱えるところからともなく、ハートの装飾を頂いたロッドがクルクルと回転しながら降ってきた。それを右手で受け止め、着地するや突風を起こして飛翔する。

問題の大蛇は、巨軀に任せて校舎に突進を繰り返していた。ズシンと揺らぎ、生徒らの絶叫があちこちで上がる。

「うわああ、たっ助けてくれ！」

『グオオオオオ』

もう一度、と魔物が低く構えたときだった。

「大丈夫だよ！」

太陽に似た光が急降下して、バチンと怪物を弾き飛ばす。

「グアッ!!」

眩い正体を確かめようと、生徒たちが目を細めた。

「まっ、まさか……あのダイアキュート!？」

赤に橙を混ぜたようなヴァーミリオンのワンピースと、煌びやかなプラチナゴールドのツインテール。

噂の魔法少女は歓声に応えようと、グラウンドの照明の上でロッドを掲げた。

「ご覧の通り! ダイアキュートが来たからには、もう大丈夫よ!」

ところが予想に反して、学園はシンと静まり返った。

「……あれ? みんな、どしたの!」

「どうしたって……胡桃ちゃん、何やってるの?」

胡桃はクラスメートと顔を合わせ、アッと声を上げた。他の教室でも。

「あれって、A組の瀬納さんじゃないか? 瀬納胡桃!」

自分のクラスでは。

「胡桃ちゃんがいらないわ! じゃあ、やつぱりあそこにいるのが?」

「瀬納さんが……だ、ダイアキュート!」

正体がばれてしまった。

(やつちやつたー!)

身長は百五十六と小柄であっても、学内有数のダイナマイトボディ。成熟した肉体に追いついていない童顔が目尻を緩めて朱に染まる。

観衆は感嘆の声を上げ、男子は喜び、女子は驚いた。

「すげえ、九十二だつてよ！」

「どうしてあんなに大きいの？ 信じられない……」

「いい質問ね！」

マーヴェルがパンツと手を叩いて皆の気を引く。

「胡桃ちゃんのオッパイやオシリが大きいのは、いままで揉んだり揉まれたり、いっつぱいしてきたからよ。ね？」

「ちっ、違います！」

「うふふ！ その証拠をこれから見せてあげるわ」

教壇に立つ魔女が、懐から数本の注射器を取り出した。注射器といっても先端の丸い玩具だが。黄色の、水というより油に近い液体が詰められている。

「ダイアキュートの本性には、みんなビックリするんじゃないかしら」

「ちよつと……その黄色いのつて、まさか」

胡桃にだけ耳打ち。

「その通り、体内のエーテルを奪う魔法のお薬よ」



マーヴェルはうち一本を片手に、ダイアキュートの極薄シヨーツをずらし始めた。

「ややや、やめてつたら！」

「全部脱がさないわよ、全部はね……うふふ」

慌てる胡桃、観客はさらなるストリップシヨールに呼吸を乱す。厚い尻肉に引つ掛かつて薄生地がなかなか下りず、サイドが両端に深く食い込む。剥け出す肌が火照り、突き刺す視線にも敏感にざわめいた。

(やああ……！)

魔法少女は手錠を鳴らして目を閉じた。脱がされる——が、中途半端なままマーヴェルの手が離れる。

「え、なんなの……きや！」

「これからよっ！」

と思いきや、尻の谷間を断ち割られ。秘めやかに咲いた菊の花を暴かれる。

「ほらみんな、よく見て。ココがダイアキュートのオシリの穴よ」

広大な尻の中心で、放射状に小皺を広げる褐色の肛門が外気に疼いた。

———(!?)

その一点で神経が研ぎ澄まされていく。身体の中まで見られているかのようで、油を注がれた炎のように羞恥が吹き荒れる。

観衆もてつきり女穴を見せるものと思つていたのだろう。不浄な排泄器官の露出に男子も女子も驚愕きょうがくしてザザッと後ろに下がる。

「えええええ!! ま、マジで?」

胡桃自身も手が動くものならスカートの裾を降ろしている。

(ウソでしょ……?)

冗談であつて欲しいと願つても。ぶしつけなまなざしで菊花を舐り尽くされる、悪寒ともいえるこの感触。心臓がバクバクと胸に響く。

これだけでは終わらないはずだ、魔女の構える注射器に恐怖を禁じえない。

「さあ、胡桃ちゃんの大好きなアレ、始めましょうか」

これからの陵辱を確信している胡桃に代わつて、生徒が尋ねる。

「先生……アレって、何ですか?」

「この子つたらねえ、人前でおトイレするのがもう大好きで」

観衆はまさか、といった顔つきだ。しかし止める者はいない、魔女の言葉が嘘か真かに興味を持つのみであり。

「よく見てるのよ、胡桃ちゃんのがりっぷり」

裸の小さなアナルに、直径五ミリの管を押し当てられる。予感的中した。

(ほ……本当に入れちゃうの!!)

胡桃はブルブルと大尻を震わせ、キュツと肛門を窄めた。そこにプラスチック製の管がズブリ、と沈んでくる。

「う、うあ……はあ」

すぐにも挿入は止まり、深度はわずか一センチといったところか。だが。

「あああッ!？」

本番はこれから、薬品の注入が始まった。注射器の中身がみるみるなくなっていく。ブチュウウウ!

ドロリとして冷たいものが腸壁に浸透した。異物感が膨張し、さらには腰のすぐ下まで這い上がってくる。

「あくうううう……!？」

初めての浣腸。それも魔法の薬だ、早速効果を發揮してダイアキュートの力を奪う。

カクンと膝が折れ、全体重が教卓と巨乳に押し掛かった。

「はあ……あ、はあっ?」

これではプラスチックを取り返したところで、とても魔法を使えない。薬品が直腸で生き物めいて流動する。

肩をいからせ背筋際立ち、疲労困憊に動悸が止まらない。しかし苦しいと思う反面、尻穴はキュツと締まってむしろ注射器に食いついた。

まさかと思っても、過熱は否定しようがない。子宮がドクンと脈を打って、トロと端から溶け始める。

引き抜かれた男根は黄ばんだ汁にまみれ、粘性の糸に雫を連ねた。

「すっげえ……はあ、瞬殺。めちゃくちゃ締まるぞ」

「よっ、ようし！ 次は俺、俺な？」

次々と男子が一物を取り出し、一列に並ぶ。魔法少女の肛姦大会、今度の怒張は増して分厚く、見えなくなるまで菊皺を陥穽に引きずり込んだ。

ズブズブズブ！

「はああん！ ら、だめえ！」

先の挿入で解された小穴を悠々と貫き、腰のすぐ裏をゴリゴリと突いてくる。大便を超える体積に直腸は飽和を極め、スペルマはさらに奥へと押し込まれた。

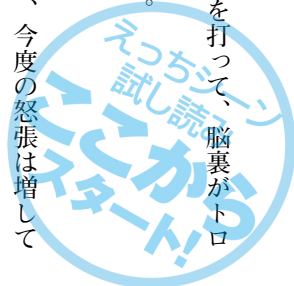
肉杭にネットリと腸粘膜が絡みつく。意志に反して肛門が異物を咀嚼する。

「どっどうなつてんだ？ か、勝手に扱かれるッ！」

男子が動かずとも、括約筋が剛直を抜き挿す。胡桃自身信じられなかった、そのうえ大股から滴る淫らな雫。極薄のシヨーツもドロドロだ。

ヂュポッ！ チュポッ！ チュポッ！

窄まらんとする菊門が黄色い泡を噴いては、品なく滑稽な音を鳴らす。回数を重ねるた



び、肉の感触が甘みを増して官能を高めていく。

「ま……マーヴェル、あたしにへんな魔法……はあ、使ったでしょ？」

「言いがかりはよして欲しいわ。胡桃ちゃんが本当にアナルで感じてるんじゃない」

生徒たちは二人の会話どころではなく、魔法少女の恥部一点から目を離せない。苛烈なストロークに屈して二本目も果てる。

「でっ出る！ くうう」

ドクンッ！ ビュク、ビュク、ビュク……。

栓を抜かれても卑猥な肛門は拡張と収縮を止めず、次の獲物を待つかのようだった。

「胡桃ちゃん、今度は俺な！ ああすげえ」

侵入者を早速ギユウツと搾り込んで、後背位で受ける胡桃にも男根の形状は鮮明だ。先端は丸くて茸のような傘を張り、根元まで剛健な太さを維持する肉の柱。

三番目の男が皆を代表して感嘆した。

「まさかダイアキュートとアナルセックスできるなんて……くう、マジで締まる！」

他の者も。

「俺、よく胡桃ちゃんでおナニーするんだよ。エロい身体してんだもん」

「俺も！ あの尻とか……たつたまんねえ！」

魔法少女として、瀬納胡桃として。これまでも下劣な男子の性欲の捌け口はぐちにされていた

ことを痛感する。

(こんなことして喜ぶなんて、お、男の子なんか)
異性にこれほど嫌悪を感じたのは初めてだった。しかし彼らは止まらず、ついには醜く膨らんだペニスを愛らしい童顔にも近づけてきた。

「一発だけで終われるかよ、はあっ！」

左右から、どちらもすずに排精を終えた肉茎だ。肛門性交の直後だけあつて腐臭が甚だしく、ドロリと粘液を滴る異様は見るに汚らわしい。

「胡桃ちゃん、しゃぶって！」

まさか口にできるものか。

「やだ、んはあ、汚いよ」

両手で幹を掴んで抗う。ところが男は悦ぶばかり。

「手でしてくれるの？ そっちでもいいよ」

「ほら、早くっ」

手錠を嵌められていては、掴んだところで腐肉を遠ざけることができず。割れた鈴口が艶ある頬を執拗になじった。

(気持ち悪い！ こんな……いやあ！)

小鼻を突く悪臭に眉を顰める。不潔極まりないアナルを穿ったばかりの、それも男根に

「可愛い」と噂されていたはずの顔をなぶ颯られる汚辱。自身の腐粘液をたっぷり塗りと塗り重ねられ、瑞々しい唇の手前で二個の瘤肉が整列する。

女子は後退するばかり。

「うわっ、きつたなあい。オシリの穴に入れたヤツよ？」

「う……ウンチがついてるかもしれないのに」

胡桃だつてそう思っている。なのに——唇の端から別の感触が顎まで伝つて落ちた。涎だ。

「はあ、んっ！ んはあ、ひあっ」

吐息が色に灼け、視界が端からぼやける。肉の擦れる音が耳にも響いて、三本目となれば粘膜も馴染んでストロークはまるやかに、甘美な法悦が思考に空白を広げていく。

（だ……だめ、なんとか……しな、くちや）

その隣でマーヴェルがそつと囁く。

「どうしたの？ 胡桃ちゃんの大好きなオチンチンよ。ペロペロしないの？」

蒼い瞳が虚ろに腐肉を捉えた。

（お……ちん、ちん……？）

後方からは肛悦の濁流。胡桃は淫猥な心地よさに沈んだ腰から下を浮かせられず、後ろの男子に体重を預けさえした。無毛の谷間に相手の性毛が挟まり、絡まり、併せて汗みず

くの尻頬を丹念に揉み扱かれる。

「あー、いいっ！ 胡桃ちゃんのおシリ、お餅みたいだよ！」

「そんな、んああ！ はあ、お、おっきい」

フリルも豪華なスカートを捲つて、純白のショーツは尻半分だけずらして悶える魔法少女に、いよいよ他の面々も欲情を禁じえない様子だった。

「順番なんか待つてられねえよ、はあ、はあ！」

各自砲身をダイヤキュートに向けて自慰を始める。さすがに女子は絶句したが。女生徒の間でどよめきが起こる。

「うそっ、やだ！」

何に驚いているのかわからなかった。舌をのたくらせて汁をすすする。

「んちゅ……んふ、んあ？」

気付いたときには、すでに胡桃は二個の瘤肉に小舌を挟んでいた。止まらない。舐めるほど舌が甘く痺れ、ショーツの裏で牝花が濃密な発情汁を垂らす。

（あ……たし、なんで……？）

ポタポタと床に落ち、胡桃も溢れる涎で手錠を濡らす。

「んはっむ、んぶう……んあ、ひらあ」

あどけない顔は不相応な艶笑を浮かべ、眉尻はこめかみまで下がっていた。学内有数の

美少女が、魔法少女ダイアキュートが、肛門を突かれながら悦んでペニスに口蜜を塗りたくっているのだ。それも、腸液にまみれたとびきり不浄な一物を二本も。

「きゃあ！ やめてよ汚い」

「ちよつと、胡桃ちゃんのカオ……どうしてあんなにいやらしいの？」

級友の言葉も、耳に響く猥音に遮られて届かない。彼女たちの冷ややかな目が、胡桃にはどこか羨望のまなざしに思えた。

（おちんちん……たくさん、こんなの……）

思考の歯車が逆回転を始め、理性が快感に押し流されて瓦解がかいしていく。

肛門が深く、深く肉茎を吸引した。

「うわっ!!」

幹の根元まで熱烈な抱擁をギューツツと見舞い、中身を搾り取る。

ビュルン！ ビュルツ！ ビュルルル！

腹に抱えたスペルマがなおも増量し、子宮がズンと脈動大きく押し下がり、菊門はフジツボのように裏返って残り汁を貪欲にせがんだ。

「胡桃ちゃん、そんなオシリで吸いつかれたら……はあっ！」

排精した男子がやつとのことで抜き取ると、肉洞がパクパクと宙を嘔む。切ない。身体の一部を失ったかのようにだ。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>